

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

カースト社会と日本人
(変わるネパールと変わらぬネパール：
グローバル化した世界に暮らす, 第2回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5120



マガール人の結婚式で演奏する、仕立師/音楽カースト (1999年)

みなみ・まきと 1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著『エスノ・サイエンス』(京大出版会 2002年)、『文化の生産』(ドメス出版 1999年)、『アジア読本ネパール』(河出書房新社 1997年)など。



変わるネパールと 変わらぬネパール グローバル化した世界に暮らす

第2回

国立民族学博物館助教授
写真文 南真木人

ネパールは世界で唯一のヒンドゥー教を国教とする王国である。ゴータマ・ブッダ(釈迦)がネパールのルンビニーで誕生したことから、ともすればネパールは仏教国と想われがちだ。だが、仏教徒は全人口の1%に過ぎず、81%がヒンドゥー教徒なのである。

ヒンドゥー教は「カースト制」という位階制度と切り離せない。カーストとは伝統的な職業に結びついた生得的な身分範疇であり、上位カーストほど清浄で、下位ほど不浄だという観念で捉えられている。そのため、ネパールの人びとは、生まれながらにして一つのカーストに属し、異なるカーストとの結婚、共食、水や食物の授受を、穢れが伝染するとして忌避するのだ。もっとも最近では、こうした規制が都市部を中心に緩和しており、カーストの伝統的な職業に就かない人も多い。だが、一般に上位カーストの人びとは、相対的に高い教育を背景に、世俗の政治、経済、社会的な領域においてもより高い位置につく。他方で、下位カースト、とくに不可触カーストといわれる人びとは、虐げられ、差別されてきた。

カースト制を基礎とする階層社会

カースト社会と日本人

は、徹底した分業社会である。例えば、私の友人の芸術家に、自分でご飯を炊いたことがないという女性がいる。彼女の家には、常にお手伝いさんがいたからだ。私は彼女を「プリンセス」と呼んでからかうが、ネパールの中・上流階層とはそういう人びとなのだ。日本人は、そこに露骨な差別を感じ、しばしば「上の者が自分で自分のことをしないからこの国は発展しないのだ」と批判する。

だが、そうだろうか? 上に立つ人は、下の人の仕事をしないことで雇用を創出しているのではないか。徹底した分業とは、上に立つ人に富の再分配を強いて、広い「社会」を創らせるシステムでもあるのだ。翻って日本は、経営者が自らお茶を入れることが美談となる国だ。聞こえはいいが、それはリストラや合理化を体よくすすめた結果ともいえる。

カースト制は、差別と共生という、一見矛盾したベクトルが並存するシステムであり、人びとは排除しあうと同時に、社会の一員として統合されているのだ。上位カーストの人はいう。「五本の指がみな同じ長さだったら、うまくモノがつかめるだろうか? カーストとは長さの違う指のようなものなのだ」と。